

メディアプロフェッショナル論講座のできるまで

後藤 明史

メディアプロフェッショナル論講座は国際言語文化研究科国際多元文化専攻の連携講座として2003年4月に前期課程6名、後期課程1名の学生を迎えて以来、今年で14年、約150名の修了生がまさに世界で活躍している。この間メディアをめぐる状況は大きく変化した。新聞、テレビは「従来メディア」と呼ばれるようになり、大きな言い方をすればインターネットが世界を変えている最中である。

2017年4月からは情報文化学部・情報科学研究科を母体とする新設の情報学部・情報学研究科のグローバルメディア論講座として、新たに学部教育を担うなど大きな節目を迎えることとなった。講座ができてからの記録は、大学の人事記録や関わった人々の記憶に残っている。しかし、この講座ができるまでに、どんな人のどんな思いがあったのか、ここに記録として残しておきたいと思う。

講座の始まる3年前に遡る。その頃私は言語文化部のLL担当助手から情報メディア教育センターの言語情報メディア部門に異動し、メディアスタジオの設置、語31番教室にCALLの導入を終えて、一息ついた頃だった。次の課題として、スタジオで作成するコンテンツの充実を考えていた。

そんな折、名古屋大学法学部のOBで、東海テレビを経て豊田市の仕事をされていた宇佐美博さんと出会うことになる。宇佐美さんは名古屋大学が制作する大学広報ビデオについて、名古屋大学側に立ってビデオ制作会社に指示をする立場で大学広報室に席を置いていらしゃった。そういう方が近くにいらしゃるならということで、情報メディア教育センターでもコンテンツ制作のアドバイザーとしてお迎えすることとなった。宇佐美さんから直接教えていただくことも多々あったが、ときには東海テレビの方をご紹介いただいたり、お台場のフジテレビに放送施設の見学に連れて行っていただいたりした。

宇佐美さんは私にいろいろなことをお話下さったが、繰り返し熱っぽく語られたのが「名大放送」と「メディアスクール」であった。「名古屋大学には多種多様な専門家があり、宝の山だ。ここから情報発信しないなんてもったいない。名古屋大学で広報番組をどんどん作って出していく」のが名大放送の構想であった。これは後に「スタジオチャンネル」につながっていった。もう一つ、創設準備が進んでいた法科大学院（ロースクール）のメディア版が、これからのメディアの人材養成には必要だというお考えであった。調べると、諸外国にはジャーナリズムスクールというものがあり、

ここがメディア人材の養成を担っていることがわかった。

宇佐美さんの「名古屋大学にメディアスクールを作ることはできませんかね」という言葉を少なくとも百回は聞いたであろうか。聞く度に「名大のような規模の大きな大学はなかなか動かないし、そもそも大学内にシーズがないじゃないですか」と応じたが、「なければ外から持ってきてくればいい」という想定外のお答えに、おもしろいけど言うほど簡単ではないだろうなと思っていた。しかし、百回も聞いていると私もメディアスクールを実現する方法がありはしないかと思うようになっていった。

一方、言語文化部は国際言語文化研究科を設立し、次の段階として全教員が大学院担当となる研究科の拡充改組を目指していた。ご存じの方も多いと思うが、当時の研究科長の平井勝利先生は研究室や研究科長室で、自らコーヒーを入れられ学生や教員にふるまうことがお好きで、私も時々ごちそうになっていた。その折りに、「拡充改組には本省（文部科学省）が飛びついてくるような目玉がいるんじゃない。いつも目につくように『目玉』って紙に書いて壁に貼っとるんじゃない。」と何度も聞かされた。しかし、そんな目玉を私が思いつくはずもなく、あくまでも他人事であった。

宇佐美さんのメディアスクール構想と平井先生の「目玉」が私の中で結びつくの半年くらいかかったであろうか。2000年の冬に、宇佐美さんと研究科長室を訪問することになった。宇佐美さんがメディアスクールの構想を話し始めたとき、平井先生が少し前のめりになった。何か話したくてイライラしている。やった、と思った。平井先生は「目玉」の話と、外の力を借りる方法に「連携講座」という制度があることを話された。

3時間くらい話したであろうか。学内の準備は平井先生が、メディア各社の協力を宇佐美さんが取りまとめること、後藤は大学とメディア各社をつなぐ役割を担うということになった。

宇佐美さんは、その日のうちに中日新聞社に連絡を入れ、翌日足を運ばれたところ、大林圭一さんにご対応いただき、前日の取締役会でも社会貢献が話題になったところで、これはいい話だと、中日としても協力できるのではと、話はとんとん拍子に進み出した。

新聞の次は放送ということで、宇佐美さんの古巣の東海テレビにはもちろん、NHKにもアプローチを始めた。宇佐美さんの大学時代の先輩でNHKのOBの方から、NHK中部ブレイズにおられた長縄年延さんを紹介していただきNHK名古屋放送局につないでいただいた。NHKは当時京都地区の大学のコンソーシアムには講義の提供をしていたが、特定の大学に講義の提供の前例がなく、難しいと思われたが、「前例がなければ作ればよい」と局長の川上淳さんのリーダーシップで前例が作られることとなった。

メディアと広告は切り離せないということで、電通へのアプローチは宇佐美さんの大学の同期で電通OBの方に、電通から公共広告機構に移られた東新家宏一さんを紹

介いただき、電通名古屋支社とつないでいただいた。

東海テレビの中島俊吉さんにソニーの放送用機器の東海地区の責任者であった野田啓一さんを紹介いただいた。野田さんはソニーの上層部まで話を上げていただき、講義担当していただくことが実現した。最後の表にあるようにソニーの講義名は「夢・メディア・ライフスタイル」である。〇〇論という名称が多い中異色である。実は担当の上條雅雄さんからは当初「ソニーはメディアである」という驚きの講義名の提案があった。大学本部に確認したところ、企業名が講義名称に入るのはちょっとということでは実現しなかった。しかし私も学生といっしょにソニーの15回の講義を受けたあとは、ソニーはメディアなんだと素直にうなずくことができた。

トヨタ自動車に企業広報の講義で加わっていただくというのは東新家さんのアイデアであった。この実現のために、豊田市の仕事を通してトヨタ自動車にパイプをお持ちの宇佐美さんが動かれたことは言うまでもない。

NTTには足がかりがないところ、宇佐美さんが名古屋支店の代表電話にかけるところから始めて実現に至った。こんなやり方もあるのかと驚かされた。

各企業との打ち合わせには、宇佐美さんのカバン持ちで同行した。講座開設直前の2002年から翌年の予定表を振りかえると、週に1回は出かけていたようだ。日本を代表する企業の役員フロアや豪華な応接室に興奮したことを覚えている。名古屋大学での在職中、最も慌ただしい時期であったが同時に充実した時間を過ごすことができた。

よい機会なので宇佐美さんの名古屋大学でのお仕事をあと2つ紹介したい。1つは、名古屋大学の広報ビデオで豊田章一郎さんのインタビューを実現したことである。これが後の名古屋大学全学同窓会会長の就任につながっていったことと思う。

もう1つは故加藤唐九郎さんの陶壁「和多津海」の名古屋市職員互助会から名古屋大学への寄贈を実現されたことである。豊田講堂の改修にあわせてシンポジオンのエントランスに飾られている。宇佐美さんは現在も公益財団法人唐九郎陶芸記念館の理事長をしておられる。なお、前の理事長は中日新聞社の大島宏彦さんであった。

講座設立に当たっては、言語文化部事務室の方々には前例のない無理難題を解決し支援いただいた。私の本来の業務でないところ、温かく見守って下さった当時の情報メディア教育センター長山本尚先生の懐の広さは大変ありがたかった。ここに名前を出させていただいた方々には、地域のためなら、母校のためならと、手弁当でご協力いただいたことも触れておかねばならない。講座設立にご尽力いただいた全ての方のお名前を紹介できたわけではなく、同時に設立後からこれまでも本当に多くの方々の支援をいただいたことは言うまでもない。感謝申し上げるとともに、今後の講座の発展を見守り引き続きお力添えをいただければと思う。

メディアプロフェッショナル論講座授業名および担当者一覧（2003年度） 所属役職は当時

	授業名	単位数	担当者	所属等
客員教授	メディアプロフェッショナル論 I -新聞論-	4	田島暁	中日新聞社役員待遇論説主幹
客員教授	メディアプロフェッショナル論 II -デジタルメディア論-	4	水野雅夫	中日新聞社論説委員
客員助教授	メディアプロフェッショナル論 III -メディアテクノロジー論-	4	川嶋典士	中日新聞社メディア局システム開発部部長次長兼業務課長
非常勤講師	現代放送メディア論	2	川上淳	NHK 名古屋放送局局長
非常勤講師	テレビ報道論	2	中森督義	NHK 文化センター名古屋総支社長
非常勤講師	放送番組制作論	2	田中聰行	(株)NHK 中部ブレイズ制作部部長
非常勤講師	民間放送事業論	4	宇佐美博	東海テレビ放送 (株) 客員
非常勤講師	放送メディア史論	2	長縄年延	(株)NHK 名古屋ビルシステムズ取締役社長
非常勤講師	ブロードバンドインターネット論	2	池田康	西日本電信電話 (株) 名古屋支店企画部長
非常勤講師	メディア・夢・ライフスタイル	2	上條雅雄	ソニー (株) B&P カンパニービジネス戦略部チーフマネージャー
非常勤講師	広告とメディア	2	東新家宏一 金川昇平	(社) 公共広告機構名古屋事務局事務局長 (株) 電通名古屋支社マーケティング・プランニング室 室長
非常勤講師	企業広報論	2	金田新 中井昌幸	トヨタ自動車 (株) 常務役員 トヨタ自動車 (株) 広報部長
非常勤講師	メディア・アクセス論	1	津田正夫	立命館大学大学院社会学研究科教授, 元 NHK チーフプロデューサー
学内授業担当	メディアコンテンツ制作演習	4	後藤明史	名古屋大学情報メディア教育センター助教授

本文中、お名前は肩書ではなく「○○さん」と表記しました。